愛知教育大学教科教育センター研究報告
第21号, pp. 79～ 85 (March, 1997)

職業的不安と大学生活充実度との関係

坂 柳 恒 夫
(職業指導教室)

The Relationship between Occupational Anxiety and College Life Fulfillment.

Tsuneo SAKAYANAGI
(Department of Career Guidance)

問題と目的

バブル経済の崩壊後,「土砂降り」から「氷河期」,さらに,「超氷河期」と形容される就職環境の深刻な状態が続いている。新規卒業者の就職は,ここ数年で売手市場から買手市場に大きく変貌した。こうした状況は,大学生の生活や卒業後の進路にも様々な影響を及ぼしている。特に,就職状況の厳しさは,心理的にも,大学生の職業的不安を増大させていると考えられる。すなわち,職業選択や就職の問題にどのように対処していけばよいのか,不安感を強めている大学生が少なくない。

大学とは,1人ひとりの学生が生涯何を目標に生きるのか,どんな職業に就くのかを探索・吟味し,将来の進路への糧にする自己実現の場として位置づけることができる。しかしながら,大学生の現状をみてみると,吉谷(1990)が指摘しているように,大学に至るまでの進路選択の過程において,職業や生き方の問題とのかかわりが十分でない環境のなかで育ったこともあって,職業選択や生き方の問題に対峙した時に,困難を訴えたり,支障をきたす場合も少なくない。この原因には,高等学校における進路指導が,進学指導に重点を置いていることにも問題があると考えられる。進路選択が将来を展望した進路設計に基づく大学や学部・学科の選択ではなく,希望する大学に入学できればよいということが最終目標となった進学先の選択・決定である場合は,大学入学後には目標を喪失してしまい,無気力状態に陥る大学生も多いことが指摘されている(中西・麻生・友田;1980,下山;1986,1995)。

従来,進路指導(職業指導)の研究領域では,Crites(1969)が職業的不決断(vocational indecision)と不安(anxiety)との関係を論じて以後,不決断と一般不安(状態不安と特性不安)との関連が問題にされてきた(Fuqua et al.,1988;Slaney,1988,清水;1983,1989)。したがって,職業選択や就職をめぐる問題から生じる職業的不安(occupational anxiety)そのものを取り上げた研究は,これまで尺度の作成を含めて,実証的データの蓄積が少ない状況にあるといえる。

このような背景ないし状況を考慮して,坂柳(1996)は,職業的不安の内容と程度を測定する職業的不安尺度(Occupational Anxiety Scale:略称ＯＡＳ)を作成し,大学生にみられる職業的不安の実態やその特質について検討を行っている。その結果,大学生の職業的不安は,男子よりも女子の方に,学年では3年生において,より高い傾向が見出されている。また,職業的不安の内容では,職業選択や就職に関する情報不足からくる不安(職業情報不安)と職業の選択・決定に関する不安(選択決定不安)が高いことなどを報告している。職業情報は,職業選択の根幹の1つであるだけに,これが不足していると認知した場合には不安感を喚起させ,さらに,この不安が選択決定不安にも影響を及ぼしているといえる。

大学生の職業的不安には,外的にも内的にも様々な要因が作用していると考えられる。前述のように,大学生の無気力や意欲低下をめぐる問題が指摘されているが,大学生活の充実度(college life fulfillment)と職業的不安との間には,どのような関係がみられるのであろうか。仮説的には,大学生活における充実度の高い学生ほど,職業的不安が低いのではないかということが予想される。

以上のことから,本稿においては,職業的不安と大学生活充実度との関係について検討することを主な目的としたい。職業的不安と大学生活における充実度との関係を検討することは,大学(高等教育段階)における進路指導(職業指導)のあり方を考えるうえで,意義があるものと思われる。

本研究では,職業的不安を「職業選択やその後の適応をめぐる職業キャリアの問題から生じる気がかりである」と定義し,いわゆる人格病理的な不安とは区別している。分析・検討の進め方としては,はじめに,①新たに作成された大学生活充実感の測定尺度としての適切さについて検討する。次に,②大学生活における充実感の一般的な傾向を把握するために,大学生活充実感の学年差と性差について検討する。そして最後に,③職業的不安と大学生活充実度との関係を検討することにする。

＜表１＞　職業的不安尺度の内容

（Ｒ：逆転項目）

【自己理解に関する不安】
Ｒ　1.自分自身のことはよくわかっているので，それほど不安を感じていない。
　7.希望する職業に自分は向いているのかどうか，不安である。
　13.自分の能力がどのような職業に向いているのかわからないので，不安を感じる。
　19.自分はどの職業にも興味が持てないような気がして，心配である。
　25.自分の短所ばかりが気になるので，就職に不安を感じる。
【職業情報に関する不安】
　2.職業選択や就職に関する正確で新しい情報が足りないので，不安を感じる。
Ｒ　8.就職先を決める資料・情報はかなり持っているので，特に不安は感じない。
　14.就職試験がどのように行われるのか，はっきりわからないので不安である。
　20.他の人が自分よりも就職について詳しいと不安になる。
　26.就職や職業生活に関する知識がまだ乏しいので，不安を感じる。
【経験欠如に関する不安】
　3.労働経験があまりないので，職業選択に不安を感じる。
　9.今の自分では就職しても仕事をこなすだけの力がないので心配になる。
Ｒ 15.これまでに働く経験をしており，働くことそれ自体については心配がない。
　21.職業選択に役立つ経験をしたことがないので，就職に不安を感じる。
　27.職場の状況を実際に見たことがないので，心配である。
【相談欠如に関する不安】
　4.将来の職業について率直に相談できる人があまりいないので不安である。
　10.就職や職業のことで，他の人と相談する機会が少ないので不安である。
　16.就職や職業の悩みはあまり他の人に話さないので，不安を感じる。
Ｒ 22.就職ではいろいろな人に相談にのってもらっており，あまり不安は感じない。
　28.職業選択に関して，今まで他の人と十分に話し合っていないので不安である。
【選択決定に関する不安】
　5.どのようにして職業を決めればよいのかわからないので不安である。
　11.希望する職業はあるが，これが最良なのかどうか不安を感じる。
　17.社会変化や景気変動が希望職業に大きな影響を与えるのではないかと心配だ。
　23.自分は就職できないのではないかと心配になる。
Ｒ 29.職業選択は十分考えたうえで行っており，あまり気にならない。
【職業適応に関する不安】
Ｒ　6.就職後の生活には，あまり不安を感じていない。
　12.職業に就いた後，自分を十分に生かすことができるかどうか心配である。
　18.就職してもうまくいかないことがありそうで，それを考えると不安になる。
　24.職場の人間関係は気をつかうので，不安である。
　30.就職しても，長く雇ってもらえるかどうかわからないので，不安である。

＜表２＞　大学生活充実感尺度の内容

（Ｒ：逆転項目）

　1. 自分は，充実した大学生活を送っている。
Ｒ　2. 毎日，変化のない単調な大学生活でつまらない。
Ｒ　3. 大学生活では，だれも自分を相手にしてくれないような気がする。
　4. 自分は，価値のある大学生活をしていると思う。
Ｒ　5. 大学生活において，自分ひとりがとり残されているようで寂しい。
Ｒ　6. 今の大学生活の過ごし方では，いけないというあせりがある。
　7. 大学生活は，充実感で満ちた楽しさがある。
　8. 大学生活において，自分の役割を果たすことに喜びを感じる。
Ｒ　9. 大学生活では日ごろ，何もやる気がしないと感じる。
　10. 自分の大学生活の過ごし方には，自信がもてる。

研究の方法

1．調査の内容

調査の内容は，次のとおりである。

(1) 職業的不安

本研究では，坂柳(1996)の作成した職業的不安尺度(ＯＡＳ)を使用した。この尺度は，健康範囲内の職業的不安に焦点を置き，それを認知的・意識的レベルで測定するものである。職業的不安の内容領域は，進路指導(職業指導)の活動領域に対応する，以下の６つの下位尺度が設定されている。

① 自己理解不安：自己理解の不足や曖昧さに起因する不安

② 職業情報不安：職業選択や就職に関する情報の不足に起因する不安

③ 経験欠如不安：職業的な経験の不足に起因する不安

④ 相談欠如不安：相談の欠如に起因する不安

⑤ 選択決定不安：職業の選択・決定に起因する不安

⑥ 職業適応不安：就職後の適応に関する不安

職業的不安の測定尺度の項目内容を，＜表１＞に示した。尺度は，各項目とも「５：よくあてはまる」，「４：ややあてはまる」，「３：どちらともいえない」，「２：あまりあてはまらない」，「１：全くあてはまらない」という５段階評定法を用い，５点から１点までの得点（逆転項目は１点から５点の得点）が与えられ，各領域の職業的不安（下位尺度）の合計得点が算出されるようになっている。したがって，各下位尺度の得点範囲は，5～25点に分布し，中間点は15点となっている。この得点が高いほど，当該領域の職業的不安感が高いことを意味している。なお，ＯＡＳは，信頼性と妥当性の観点より検討が加えられ，受容できる水準にあることが検証されている(坂柳，1996)。

(2) 大学生活充実感

大野(1984)，宮下・小林(1981)の研究などを参考にして，大学生活における充実感を測定する項目を10項目作成した。本尺度の内容は，主として，大学生の内的な適応状態に着目した充実感や心理的安定感などが中心になっている。大学生活充実感の測定尺度の項目内容を，＜表２＞に示した。

尺度は，各項目とも「５：よくあてはまる」，「４：ややあてはまる」，「３：どちらともいえない」，「２：あまりあてはまらない」，「１：全くあてはまらない」という５段階評定法を用い，５点から１点までの得点(逆転項目は１点から５点の得点)が与えられるようになっている。したがって，この尺度の得点範囲は，10～50点に分布し，中間点は30点となっている。この得点が高いほど，大学生活への充実度が高いことを示している。

2．調査の対象・時期

本調査は，1994（平成６）年６月上旬から中旬かけて，愛知県内にある国立大学および私立大学の１年生から４年生までの男女を対象に実施した。以後の分析において対象となった数は，＜表３＞に示すように，男子 262名，女子 198名の計 460名であった。

＜表３＞　調査対象者の内訳

	１年	２年	３年	４年	計
男　子	14	23	140	85	262
女　子	28	9	92	69	198
計	42	32	232	154	460

また，新たに作成された大学生活充実度尺度における再検査による安定性(信頼性)を検証するため，大学生 141名を対象にして，３週間の間隔をおいて２回の調査が実施された。

結果と考察

1．大学生活充実感尺度の検討

(1) 項目水準での内的整合性の検討

まず，新たに構成された大学生活充実感尺度の内的整合性(等質性)を検討することにする。＜表４＞は，主成分分析の結果，尺度得点と尺度に含まれる項目得点との相関係数，および各項目の平均と標準偏差を示したものである。

大学生活充実感尺度を構成する10項目について，主成分分析を行ったところ，対象者全体では第１主成分の負荷量は，.539～.826と，すべての項目において高い値が得られ，１次元性が認められた。また，性別の分析結果をみても，第１主成分の負荷量は，男子では，.529～.847と，女子では，.447～.799となっており，いずれの項目の負荷量も高くなっている。したがって，大学生活充実感尺度は，単一の総合尺度として構成できることが確認された。

項目－全体(尺度)相関は，対象者全体についてみると，.457～.751となっており，すべてプラスの有意に高い相関係数が得られた。性別の結果をみると，項目－全体(尺度)相関は，全般的には，男子の方が女子よりも高くなっているものの，総じて十分受容できる水準にあるものと判断できる。

また，大学生活充実感尺度の各項目得点の平均は，全体では，2.72～4.12，男子では，2.78～4.16，女子では，2.60～4.06，となっている。

以上のことから，項目水準でみた場合，大学生活充実感尺度の内的整合性(等質性)は，高いものであると判断できる。

＜表４＞　大学生活充実感尺度の主成分分析結果，項目得点と尺度得点との相関係数および各項目の平均・標準偏差

項目	全体 (N=460)				男子 (N=262)				女子 (N=198)			
番号	主成分	I-T相関	平均	ＳＤ	主成分	I-T相関	平均	ＳＤ	主成分	I-T相関	平均	ＳＤ
1.	.803	.719	3.37	1.06	.809	.733	3.25	1.13	.799	.698	3.52	.93
R 2.	.761	.675	3.05	1.21	.804	.731	2.91	1.30	.667	.559	3.23	1.06
R 3.	.539	.461	4.12	.87	.529	.457	4.16	.94	.574	.489	4.06	.76
4.	.826	.751	3.10	1.10	.847	.785	2.96	1.20	.786	.687	3.28	.94
R 5.	.551	.475	3.96	.96	.597	.527	3.98	1.05	.447	.366	3.94	.83
R 6.	.568	.475	2.76	1.19	.616	.528	2.78	1.24	.484	.383	2.74	1.12
7.	.810	.729	2.98	1.07	.830	.761	2.94	1.15	.774	.665	3.03	.97
8.	.560	.457	2.89	1.07	.589	.497	2.88	1.15	.500	.371	2.90	.95
R 9.	.709	.629	3.34	1.15	.734	.662	3.28	1.24	.652	.558	3.41	1.03
10.	.783	.709	2.72	1.08	.816	.752	2.81	1.18	.750	.654	2.60	.93

(注1) R は，逆転項目を示す。
(注2) 相関係数は，すべて Ｐ＜.001 で有意である。

(2) 尺度水準での内的整合性の検討

次に，大学生活充実感尺度の内的整合性を尺度水準で検討するために，Cronbachの標準化されたα係数を求めた。結果は，＜表５＞に示すとおりである。

＜表５＞　大学生活充実感尺度の内的整合性

	全体	男子	女子
大学生活充実感	.880	.896	.845

(注) 数値は，標準化されたα係数である。

対象者全体では，.880，男子では，.896，女子では，.845と，満足すべきα係数が得られた。

以上の結果から，大学生活充実感尺度は，内的整合性の観点より，一貫した内容を備えており，信頼性の高い尺度であると判断できる。

(3) 安定性の検討

大学生活充実感尺度の安定性(信頼性)を再検査法によって検討する。＜表６＞は，大学生活充実感尺度における１回目時，２回目時各々の平均得点，標準偏差，そして，１回目と２回目との間の得点の安定性係数を示したものである。再検査法によって安定性を検討する場合，着目すべき点は次の２点になる。まず第１点は安定性係数の指標としての相関係数である。相関係数が高いということは，１回目に高得点であった者は２回目にも高得点であり，１回目に低得点であった者は２回目にも低得点であることを示し，相関係数が高ければ，その尺度の安定性(信頼性)が高いということになる。第２点は分布の型，とりわけ標準偏差についてである。標準偏差に変化がみられないということは，たとえ平均得点が変化していても，分布が平行移動していることを示し，標準偏差の変化が小さく，相関係数が高ければ分布に変化がほとんどない，換言すれば安定性が高いと判断される。

＜表６＞　大学生活充実感尺度の安定性

１回目		２回目		安定性
平均	ＳＤ	平均	ＳＤ	r
32.56	8.39	33.09	8.20	.911

(N=141)

＜表６＞をみると，大学生活充実感尺度は，.911という高い安定性係数を示している。また，尺度における２回の平均得点は，３週間の間隔ということもあり，やや増加傾向が認められるものの，標準偏差はほぼ近似している。

以上のことから，大学生活充実感尺度の安定性は十分に高いことが確認されたといえる。

２．大学生活充実感の一般的傾向

(1) 項目ごとにみた傾向

大学生は，大学生活に充実感をどの程度感じているのだろうか。ここでは，大学生活における充実感の質的な差異を把握する目的で，各項目ごとに，学年別・性別による傾向を分析していくことにする。＜表７＞は，大学生活充実感の平均得点と標準偏差を，学年別と性別に示したものである。

各項目ごとに，学年（卒業学年と非卒業学年の２分類）と性の２要因分散分析を行った結果，交互作用はいずれも有意ではなかった。

① 学年および性に関する主効果

学年および性に関する主効果は，10項目中，３項目に関して有意であった。以下，項目ごとに列記する。

＜表７＞　大学生活充実感(各項目)の学年別・性別の平均得点，標準偏差および分散分析結果

	卒業学年		非卒業学年		分散分析(Ｆ値)		
	男子	女子	男子	女子	主効果		交互作用
	N=85	N=69	N=177	N=129	学年	性	
1. 自分は，充実した大学生活を送っている。	3.49	3.62	3.13	3.47	7.31	7.06	0.97
	(1.06)	(0.84)	(1.14)	(0.97)	＊＊	＊＊	ns
R 2. 毎日，変化のない単調な大学生活でつまらない。	3.25	3.29	2.75	3.19	7.54	7.68	2.97
	(1.27)	(1.02)	(1.29)	(1.08)	＊＊	＊＊	ns
R 3. 大学生活では，だれも自分を相手にしてくれないような気がする。	4.25	4.12	4.12	4.03	1.63	1.57	0.06
	(0.77)	(0.78)	(1.01)	(0.76)	ns	ns	ns
4. 自分は，価値のある大学生活をしていると思う。	3.13	3.42	2.88	3.20	4.89	9.34	0.03
	(1.16)	(0.96)	(1.21)	(0.92)	＊	＊＊	ns
R 5. 大学生活において，自分ひとりがとり残されているようで寂しい。	4.02	3.97	3.95	3.92	0.39	0.19	0.01
	(0.98)	(0.80)	(1.09)	(0.85)	ns	ns	ns
R 6. 今の大学生活の過ごし方では，いけないというあせりがある。	2.93	2.91	2.71	2.64	4.33	0.18	0.04
	(1.20)	(1.16)	(1.25)	(1.09)	＊	ns	ns
7. 大学生活は，充実感で満ちた楽しさがある。	3.19	3.22	2.82	2.93	10.01	0.69	0.15
	(1.10)	(1.00)	(1.15)	(0.95)	＊＊	ns	ns
8. 大学生活において，自分の役割を果たすことに喜びを感じる。	3.04	2.87	2.80	2.92	1.02	0.06	1.79
	(1.13)	(0.98)	(1.16)	(0.94)	ns	ns	ns
R 9. 大学生活では日ごろ，何もやる気がしないと感じる。	3.35	3.51	3.24	3.36	1.19	1.49	0.02
	(1.24)	(0.90)	(1.24)	(1.09)	ns	ns	ns
10. 自分の大学生活の過ごし方には，自信がもてる。	2.93	2.68	2.76	2.55	2.09	4.72	0.04
	(1.16)	(0.96)	(1.19)	(0.91)	ns	＊	ns

(注)　R：逆転項目，＊＊：p＜.01，＊：p＜.05，ns：有意差なし

項目１の「自分は，充実した大学生活を送っている」は，学年では，非卒業学年(１年生～３年生)よりも卒業学年(４年生)の方が，性別では，男子よりも女子の方が充実度の水準が高い。

項目２の「毎日，変化のない単調な大学生活でつまらない」に関しては，卒業学年よりも非卒業学年の方が，そして，女子よりも男子の方が充実度の水準が低くなっている。

項目４の「自分は，価値ある大学生活をしていると思う」は，学年では，非卒業学年よりも卒業学年の方が，そして，性別では，男子よりも女子の方が充実感が高くなっている。

② 学年のみに関する主効果

学年のみに関する主効果は，２つの項目で有意であった。

項目６の「今の大学生活の過ごし方では，いけないというあせりがある」に関しては，卒業学年よりも，非卒業学年の方が，あせりを感じている。

項目７の「大学生活は，充実感で満ちた楽しさがある」に関しては，卒業学年の学生の方が，非卒業学年と比べて，学生生活の充実度が高くなっている。

③ 性のみに関する主効果

項目10の「自分の大学生活の過ごし方には，自信がもてる」について，有意であった。大学生活の過ごし方については，男子よりも女子の方に，自信のなさがみられる。

(2) 尺度からみた傾向

＜表８＞は，大学生活充実感10項目を合成した総合尺度における学年別・性別の平均得点と標準偏差を，

＜表８＞　大学生活充実度の学年別・性別の平均得点，標準偏差および分散分析結果

	全学年		卒業学年		非卒業学年		分散分析結果	
	平均	ＳＤ	平均	ＳＤ	平均	ＳＤ	Ｆ値	
男　子	31.94	(8.37)	33.58	(8.08)	31.15	(8.42)	性	1.05
女　子	32.71	(6.16)	33.61	(5.84)	32.22	(6.29)	学年	7.13 ＊＊
全　体	32.27	(7.50)	33.59	(7.14)	31.60	(7.60)	交互作用	.49

(注)　＊＊　p＜.01

＜表９＞　職業的不安と大学生活充実度との関連

	全　体	卒業学年		非卒業学年	
	(N=460)	男子(N=85)	女子(N=69)	男子(N=177)	女子(N=129)
自己理解不安	-.346 ＊＊	-.442 ＊＊	-.359 ＊	-.339 ＊＊	-.229 ＊
職業情報不安	-.285 ＊＊	-.437 ＊＊	-.172	-.268 ＊＊	-.161
経験欠如不安	-.261 ＊＊	-.370 ＊＊	-.312 ＊	-.185	-.225
相談欠如不安	-.397 ＊＊	-.493 ＊＊	-.346 ＊	-.345 ＊＊	-.364 ＊＊
選択決定不安	-.305 ＊＊	-.366 ＊＊	-.193	-.315 ＊＊	-.245 ＊
職業適応不安	-.318 ＊＊	-.401 ＊＊	-.247	-.329 ＊＊	-.239 ＊
総　　合	-.375 ＊＊	-.479 ＊＊	-.332 ＊	-.346 ＊＊	-.306 ＊＊

（注１）　＊＊ p＜.001，＊　p＜.01

また，大学生活充実度を従属変数として，学年および性による２要因分散分析の結果を示したものである。

大学生活充実度を単一の総合尺度とした場合には，学年の主効果のみが有意であった。すなわち，大学生活の充実度は，男女ともに卒業学年の学生の方が，そうでない学生よりも，より高い傾向が認められる。

３．職業的不安と大学生活充実度との関連

職業的不安が大学生活充実度とどのような関係にあるのかを検討してみる。＜表９＞は，職業的不安と大学生活充実度とのピアソン積率相関係数を示したものである。注目される結果を次に列挙する。

① 全体的傾向として，職業的不安と大学生活充実度との間には，マイナスの相関が認められる。すなわち，職業的不安が高いほど，大学生活への充実度が低い傾向が示されている。とりわけ，職業的不安領域のなかで，「相談欠如不安」と「自己理解不安」は，大学生活への充実度との関連が強くなっている。

② 卒業学年にある男子では，すべての組合せにおいて有意なマイナスの相関が認められた。卒業学年男子の場合には，職業的不安の性質は異なっていても，当該領域の不安が高い場合には，大学生活の充実度が低い傾向が認められる。

③ 卒業学年の女子は，同学年の男子と比較すると，有意な相関の数が少ない。大学生活への充実度が高い場合であっても，「職業情報不安」や「選択決定不安」などは必ずしも軽減されるとはいえない。

④ 非卒業学年の男子では，「経験欠如不安」を除いた，残りすべての組合せにおいて有意なマイナスの相関が認められた。卒業学年でない男子の場合には総じて，大学生活への充実度が高いものであれば，職業的不安は低い傾向がうかがわれる。

⑤ 非卒業学年にある女子の場合は，同じ非卒業学年にある男子と比較すると，有意な相関の数がやや少ないものの，概して大学生活充実度が高いものほど，職業的不安は低い傾向がみられる。

全体の考察とまとめ

１．大学生活充実感尺度について

大学生活における充実感の程度を測定するために，大学生活充実感尺度が作成された。尺度の検討結果は，次のように要約できる。

① 大学生活充実感尺度の内的整合性を，項目水準および尺度水準で検討した結果，大学生活充実尺度は，内的整合性の点で一貫した内容を備えており，信頼性の高い尺度あることが検証された。

② 大学生活充実感尺度の安定性について，再検査法により検討した結果，高い安定性係数が得られ，１回目の平均得点・標準偏差と２回目のそれとがほぼ近似していた。この結果から，大学生活充実感尺度は，安定性の観点からも，信頼性の高い尺度であることが保証された。

③ 大学生活における充実感の項目間の関連性を検討した結果，全体，性別のいずれも，すべての組合せにおいて，有意なプラスの高い相関が認められた。

以上の検討結果を総合的に判断すると，「大学生活充実度尺度」は，おおむね，信頼性と妥当性のある尺度であることが保証されたといえる。

２．大学生活充実感の一般的特徴について

尺度でみた大学生活充実感の一般的特徴について考察する。全般的傾向として，大学生活における充実度は，非卒業学年と比較すると卒業学年の方に，より高い傾向が認められた。この結果については，卒業学年の学生の場合には，卒業研究(卒業論文)や就職活動など，大学生活の総決算となるようなイベントが多く，したがって忙しさは感じながらも，そうした課題に取り組むことにより充実感が得られているのではないかと推察される。

３．職業的不安と大学生活充実度との関連について

職業的不安が，大学生活における充実度とどのような関係にあるのかを分析した結果，かなり明確な関連

が見出された。全体的傾向として，大学生活への充実度が高い学生ほど，職業的不安感が低くなっていた。とりわけ，大学生活の充実度は，「相談欠如不安」と「自己理解不安」を緩和する傾向の効果が示唆されている。大学生活の充実感は，人間関係の良好な状態とも関係していることから，相談希求などが充足されているものと解釈される。

学年による傾向をみると，職業的不安と大学生活充実度との関連は，卒業学年の方が非卒業学年よりも，強まっている。換言すれば，大学生活が充実しているほど，職業的不安が低いという傾向は卒業学年の方が一層強くなっている。

性別に着目すると，男子では，すべての組合せにおいて有意なマイナスの相関が確認された。男子の場合には，職業的不安の内容領域に差異があっても，当該の職業的不安が低いほど，大学生活への充実度が高くなっている。一方，女子は，男子と比較すると，有意な相関の数は相対的に少なくなっていた。これに関しては，女子学生を取り巻く就職環境が，男子以上に厳しいものであるという状況認知から，大学生活に充実感を得ている場合であっても，就職それ自体は気がかりな問題として捉えている結果ではないかと推察される。

以上の諸結果を総合化して考察すると，予想されたように，職業的不安の高い学生は，大学生活の充実度も低調な傾向が認められる。このことは，大学生活に適応して，充実感が感じられるような状態にあるならば，職業的不安も軽減されてくる傾向を示唆している。充実感は，自分の目標に向かって，前進していることが自覚できたときに，感知されるものであるといえる。したがって，大学生自身が，大学生活の過ごし方について，自分なりの具体的な目標を設定し，それを達成していくための主体的な活動を展開していくことが重要であると考えられる。そして，現実の就職状況を直視したうえで，当該の職業的不安と正面から取り組む自律的な態度が望まれる。

大学就職指導に関する調査(日本労働研究機構,1992)によると，ガイダンスや進路希望調査などの指導は，多くの大学で実施されているが，個別相談や企業・業界説明会は実施大学が少なく，特に国立大学では低調になっている。職業選択や就職の問題は，自己の人生(生涯)の方向にかかわってくるだけに，この問題にどのように対処していけばよいのか，不安感を強めている大学生も少なくない。また，本研究で明らかにされたように，職業的不安の強い学生ほど，大学生活の充実度が低下する傾向がみられる。したがって，学生のこうした実態を踏まえたうえで，キャリア・カウンセリングの実施など，大学での進路指導的介入が必要であると思われる。

4．今後の課題について

大学生の職業的不安は，就職環境的要因と学生の個人的要因との動態的相互作用を通して形成されるものであると考えられる。本研究では，職業的不安と大学生活充実度との関連について検討したが，今後は，職業的不安とキャリア成熟度との関連について，検討を加えていく予定である。

引用・参考文献

Crites,J.O. 1969 *Vocational psychology* Mcgraw-Hill.

Fuqua,D.F.,Newman,J.L. & Seaworth,T.B. 1988 Relation of state and trait anxiety to different components of career decision *Journal of Counseling Psychology*,35,153-158.

宮下一博・小林利宣 1981 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学研究第29巻, 297-305.

中西信男・麻生誠・友田泰正（編）1980 就職－大学生の選職行動 有斐閣

日本労働研究機構 1992 大学就職指導と大卒者の初期キャリア(1) 調査研究報告書No. 33.

大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 教育心理学研究第32巻, 100-109.

坂柳恒夫 1996 大学生の職業的不安に関する研究 広島大学・大学教育研究センター 大学論集第25集, 207-227.

清水和秋 1983 職業的意思決定と不決断 関西大学社会学部紀要第14巻(2), 203-222.

清水和秋 1989 中学生を対象とした進路不決断尺度の因子的不変性について－ＣＯＳＡＮを使用して 関西大学社会学部紀要第21巻(1), 143-176.

下山晴彦 1986 大学生の職業的未決定の研究 教育心理学研究第34巻,20-30.

下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究第43巻,145-155.

Slaney,R.B. 1988 The assessment of career decision making In Walsh,W.B. & Osipow(eds.) *Career decision making* Hillsdale,NJ;Lawrence Eribaum Assoc.

吉谷二郎 1990 生涯にわたるキャリア形成と職業指導 雇用問題研究会